

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653246

研究課題名(和文) 学校 - 保護者間のトラブル解決をめざす対応力育成ワークショップのプログラム開発

研究課題名(英文) Creating the training program (workshop) for solving the serious troubles caused from teachers and parents

研究代表者

小野田 正利 (ONODA, Masatoshi)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：60169349

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：現代の学校にとって、喫緊の課題となっている保護者と学校(教職員)と間のトラブルの早期解決と未然防止を目的とした、教職員の側の力量形成のためのワークショップ・プログラムを2つ開発した。

一つは、ロール・プレイング方式のもので、保護者と教職員の両方の役割を演じることによって、相手の心情や立場を押し量る力をつけるものである。二つめはマッピング(図式化)の方法の一つとしてのエコロジカル・マップを書くことによって、複雑化するトラブルの出口を探る方法である。特に後者については、学校現場で活用可能なDVD計6巻を監修し刊行して、各地での実践的研究に活かすことができた。

研究成果の概要(英文)：In 2000s, serious troubles caused from teachers and parents have been the one of big educational problems of Japanese. The aim of this study is to create the training program (workshop) at schools for solving proposal about putting down troubles between teachers and parents. We produced two workshop style training program. One is role-playing method (replacing the role of parents with the role of teachers). Second is ecological-mapping method (making a big map collected many information of that trouble).

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：学校トラブル 保護者対応 ワークショップ ロール・プレイング エコロジカル・マップ 保護者連携

1. 研究開始当初の背景

(1) 激動する社会状況の中で、学校と保護者の関係は、かつてないほどの変貌を見せており、時として両者の間に良好な関係性が構築されず、対立を深めている場合が少なくない。教職員にゆとりがなく、子どもと向き合う十分な時間が減少しつつある一方で、保護者などからの要求や要望は多様化している。いま全国の多くの学校で、保護者とどのように向き合うか、諸要求にどのように応えるかという「保護者対応」は緊急の課題になっている。

学校側は保護者などからの要望や要請に応えることは当然であるとしても、その内容が予期せぬものであったり、とげとげしい言い方で迫られたりすると、窮地に陥ることも多い。「なぜ、そんなことを要求されるのか」という気持ちが先に立てば、「難しい親だ」と決めつけをすることにより、正当な要求にさえも応えきれずに、トラブルから紛争にまで事態が深刻化することもある。

(2) 学校への無理難題要求を研究している研究代表者の下には、10年ほど前から問い合わせが相次ぎ、講話的研修ではなく“学校組織としての対応力”や“課題に向き合う姿勢”を培うことが強く要請されてきた。このため、数年前からは「相手の立場になって考えてみる」という認知療法的手法を応用したロールプレイングを、全国の200箇所以上で実施してきたが、「極めて役に立つ」とか「向き合い方の極意が見えた」と大きな評価を得ることができた。

しかし「対応力」の向上には、なおもトラブルの原因や背景を分析する力の育成が必要であることを痛感した。そこに、福祉学の分野で開発が進んでいるエコロジカル・マップづくり(問題の背景分析、問題の生成と対処)のワークショップを組み合わせることで、問題をきちんと見立てる力(アセスメント力)が向上し、解決に向けてのプランニングが効果的になり、よりいっそうの対応力の向上が期待できることを確信するに至った。

2. 研究の目的

(1) いま学校現場では、かつてなかったほどの保護者からの多様な要求の前に、応答や対応に苦しむ教師が急増し、時にそれにより教育活動に支障が出たり、教師の意欲の低下をもたらすという問題が深刻化している。本研究では、保護者と学校(教師)の間に発生するこういったトラブルを未然に防ぎ、あるいは解決へとつなげるための、学校側のスキルアップをめざすワークショップ・プログラムを開発する。

本研究では焦点をしばり、学校種別(保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校)ごとの保護者との関係で生じるトラブルを想定

して検討することにした。特に対応が困難となるケースに集約しながら、相手の立場に立って見たときに感じる対応の不手際さを疑似体験するロール・プレイング的手法と、図式化(マッピング)の一形態としてのエコロジカル・マップづくりの効果的手法を開発することを目的とした。

具体的には、ワークショップ実践のための手法を確立し、理論化すること(ワークショップのプログラムづくり)どこでも実践応用が可能となるようなマニュアルを作成し、ワークブックおよび教材キットを開発することを旨とするにした。

これにより、広く全国の教育委員会や教育センター等、あるいは個々の学校現場で活用できる研修プログラムの効果的実践が可能になると考えた。

(2) これまでの教育学研究にはなかった、より実践的で具体的な効果のあるワークショップの開発は、学校と保護者双方の良好な関係づくりに重要な貢献ができるものといえ、また緊急性とともにも需要度も高いと考える。学校トラブルの早期解決と事前段階での最大限の予防的措置は、学校側だけでなく保護者も同時に切望しているものであり、対応力の向上は必須のものとなっている。

3. 研究の方法

(1) 研究経費が交付申請時の段階よりも大幅に削減されたために、当初予定していた、教職員の階層別(初任者、教職10年目、学校管理職登用時)のワークショップのプログラム開発は断念し、学校種別ごとに幾分異なる保護対応の課題を抽出しながら、それらのテーマごとに研修プログラムの開発をめざすことにした。

まず保護者とのトラブル対応に関わって、質問紙調査およびインタビュー調査により、課題群の抽出をおこなう。同時並行的に、保護者トラブルの際の成功事例と失敗事例の丹念な分析によって、分岐あるいは転換点となる学校側の対応(さまざまな行動と言葉)の普遍性について考察する中で、ワークショップ構成に必要ないくつかの要素を確認する。

(2) これらの基礎作業の上に、トラブル全体の問題構造を見立て、解決の糸口を探る力(アセスメント力とプランニング力)の育成のために、複数のエコマップづくりの演習事例を作成し実践する。また、対応力の向上のために、具体的な場面を想定したロールプレイの事例を作成および実践し、保護者側と学校管理職側の双方の思いや意識のズレについての認識を深める。

(3) これらの作成したワークショップ教材を用いて、研究代表者の下に研修依頼が多く寄せられる全国各地の教育委員会や教育センタ

一、さらには私立学校を含めた個別の学校単位での研修会で実践し、ワークショップ・プログラムの改善課題を見極めて改良を重ねていく。これらに対する評価は、実践後の受講者からの評価だけでなく、申請者自身の別の科学研究費による研究組織(「新・学校保護者関係研究会」)に加わっている、医学、心理学、福祉学、法律学、危機管理学などの専門研究者からのレビューを受ける。

(4)開発したプログラムは、多くの学校や教育委員会・センターでの応用が可能になるための実践経過を簡潔に示す視覚的補助教材も必要であり、このためのDVD作成をあわせておこなう。このほか、学会での口頭発表をおこない、研究者間での批評を受ける。

4. 研究成果

(1)本研究の最大の成果は、学校現場でいつでも活用できるように、学校種類ごとに、また基本編と難しい事例に遭遇した場合の上級者編に分けた計6本のDVD教材を監修作成し、日本経済新聞出版社から発行できたことにある。これらのDVDは、基本編、幼・保育園編、小学校編、中学校編、高等学校編、そして「対応が難しいケース編」で構成している。

まず基本編では、保護者対応の基本認識と、教職員が陥りがちになる傾向について、集団で討議するワークショップを示している。幼・保育園編から高等学校編までは、それぞれの校種ごとで生じやすい対応トラブルの事例をドラマ仕立てで展開し、ところどころにストップ・モーションを入れて、その事例についてどのように考えるかの討議の場を提供し、それぞれ3つほどの事例について、ロール・プレイングの方法と手順を具体的に示した。

(2)一般的にはこのような対応力を教職員が身につけることで、ある程度のトラブルを解決へと導けることを押さえた上で、それでもそう簡単に円満解決とはいかない事案もまたいくつか存在する。そのことを具体的に示したのが「対応の難しいケース編」(第6巻)である。この中では、福祉学や家庭看護学の領域で用いられているエコロジカル・マップ(人的社会的環境の見取り図)を使うことを中心にし、解決の方向性や手段が見えにくい実に難しいトラブルの見立て(アセスメント)と、教職員の共同性を活かしながらの方策の立て方(プランニング)を提示している。

(3)このワークショップの基本は、DVDの観賞と若干の解説、グループ(5~6名程度)に分かれて教材の提示、エコロジカル・マップの共同作成、各グループの成果の全体の場合での発表と共有、研究代表者からの解説とコメント、を流れとした(90分~120分)。

この方法を3年間にわたって、全国の50か所近くの研修会で実行してきた。実施後に評

価アンケートを重ねてきたが「大いに参考となった」「自分の学校でもすぐに取り入れたい」という感想が圧倒的多数であり、同時にワークショップの完成度に対する評価も4段階で、常に3.5以上という極めて高いものを確保することができた。

(4)学校と保護者の間に生じるトラブルは、近年その発生頻度も程度も激しさを増してきている。そしてこの問題は、大都市部に限定した現象ではなく、農山村部でも人口減少地域でも同様の事象がいくつも生じており、それゆえに学校の教職員の対応力あるいはトラブル解決力が極めて重要なものとなっている。

こういったことから、本研究で開発した研修プログラムは、いまの全国各地の学校が抱えている保護者対応トラブルの現実の課題の解決にも応えられるものとなり、同時に他の難しいケースにも応用できるという確信を得つつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計17件)

小野田正利、保護者と教職員のトラブルに、管理職としてどう対応するべきか、査読なし、教職研修(教育開発研究所)2014年5月号、pp.26-27.

小野田正利、待てない、待たせることが悪の時代と学校 - 保護者間トラブル、査読なし、生活協同組合研究(公益財団法人・生協総合研究所)第449号、2013、pp.5-11.

田村和男・船越康成・松丸正・小野田正利、(座談会)地方公務員災害補償基金制度と教職員の働き方、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第179号、2013、pp.6-25.

小野田正利、教師が訴訟せざるをえない背景、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第178号、2013、pp.36-41.

宮崎仁史・小野田正利、(対談)追い詰められた教師が保護者を訴える時、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第178号、2013、pp.8-23.

小野田正利・青山直城・石丸俊江・木田哲生・笑福亭竹林・仲尾久美、(座談会)カラーリングあふれる時代の学校の頭髪指導、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第177号、2013、pp.8-27.

小野田正利・橋本典久・渡邊和也・市口実奈子ほか、(座談会)学校・園と近隣住民とのトラブルをどう解決するか、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第176号、2013、

pp.8-27.

小野田正利、(連載)普通の教師が普通に生きる学校～モンスターペアレント論を超えて、査読なし、内外教育(時事通信社)第6070号～第6322号、2011年4月～2014年3月、第34回～第168回(計135回) 毎回2頁

小野田正利、(連載)悲鳴をあげる学校～学校への要望・苦情そしてイチャモン、査読なし、月刊高校教育(学事出版)2011年4月～2014年3月、第61回～第97回(計36回) 毎回6頁(2013年4月からは毎回4頁)

木村和子・小笠原里夏・小野田正利、(鼎談)学級崩壊状況の立て直しは新人教師には不可能な業務、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第175号、2012、pp.8-23.

小野田正利、先輩教師も保護者と向き合うことに苦労した、査読なし、季刊教育法(エイデル研究所)第175号、2012、pp.36-39.

小野田正利、ロール・プレイからエコロジカル・マップへ、査読なし、月刊高校教育(学事出版)45巻12号、2012、pp.58-63.

小野田正利、白い丸いテーブルの話～ムダと思われた時間と空間が創り出していたもの、査読なし、教育(かもがわ出版)802号、2012、pp.5-14.

小野田正利、同僚性は汗と笑いの中から～職員室の白い丸いテーブル、査読なし、信濃教育(信濃教育会)1504号、2012、pp.10-18.

小野田正利、モンスターのような親は増えたのか～親の怒りと訴えの背後にあるもの、査読なし、大久保智生・牧郁子編、実践をふりかえるための教育心理学、ナカニシヤ出版、2011、pp.13-26.

小野田正利、モンスターペアレント論を超えて～保護者の思いと背景を読み取る、査読なし、日本小児看護学会誌、第20巻3号、2011、pp.97-102.

小野田正利、再考：保護者対応～モンスターペアレント論を超えて、査読なし、学校の危機管理ハンドブック(ぎょうせい)2011、pp.5353-5359.

〔学会発表〕(計4件)

小野田正利(招待講演)モンスターペアレント論を超えて～保護者の思いと背景を読み取る、日本小児看護学会第21回学術集会、2011年7月24日、埼玉会館

小野田正利(招待講演)モンスターペアレ

ント論を超えて～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性、第16回学校臨床心理士全国研修会、2011年8月20日、ウエスティン都ホテル京都

小野田正利(招待講演)児童虐待における教育現場の予防的意義～スクールソーシャルワークの可能性、日本子ども虐待防止学会第17回学術集会、2011年12月3日、つくば国際会議場

小野田正利(招待ワークショップ)保護者の立場に立つと教師の態度にむかつく自分がある、日本学校メンタルヘルス学会第15回大会、2012年3月10日、国立オリンピック記念青少年総合センター

〔図書〕(計6件)

小野田正利、大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、ワークショップテキスト「エコロジカル・マップ」づくりを通して難しくなる保護者対応トラブルの出口を見つけよう、2014、8頁

小野田正利、大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、教職員にもディセントワークを～メンタルヘルスと過労死問題、2014、12頁

小野田正利、大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、こころの不安定さを抱えている保護者とのトラブル～対応が極めて難しくなるケース(1)、2014、16頁

小野田正利、時事通信社、普通の教師が普通に生きる学校～モンスター・ペアレント論を超えて、2013、198頁

小野田正利、大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、学校・園の近隣トラブルを考える～互いの顔が見える関係づくり、2013、12頁

小野田正利、大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、共同性は汗と笑いの中から～孤立を防ぎ、教職員のギリギリの共同性を取り戻すために、2012、12頁

〔DVD〕(計6件)

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教員のための保護者対応力向上シリーズ 第1巻「保護者対応の基本」、2012、20分

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教員のための保護者対応力向上シリーズ 第2巻「保育園・幼稚園編」、2012、37分

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教

員のための保護者対応力向上シリーズ 第3
巻「小学校編」, 2012、37分

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教
員のための保護者対応力向上シリーズ 第4
巻「中学校編」, 2012、35分

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教
員のための保護者対応力向上シリーズ 第5
巻「高校編」, 2012、37分

小野田正利監修、日本経済新聞出版社、教
員のための保護者対応力向上シリーズ 第6
巻「対応の難しいケース編」, 2012、25分

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野田 正利 (ONODA Masatoshi)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：60169349

(2) 研究分担者

なし()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし()

研究者番号：